



大門遺跡

袋井市大門遺跡第4次

発掘調査報告書

1988

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和63年度袋井市消防団第2分団消防車庫建設に伴う袋井市教育委員会が実施した、大門遺跡第4次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、袋井市教育委員会社会教育課図書館松井一明を担当として実施した。
3. 本調査、本書の刊行に係る事務について、袋井市教育委員会社会教育課文化振興係が行った。
4. 本書の編集、執筆、挿図、図版の作成は松井が行った。遺物写真は吉岡伸夫氏による。
5. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

1 調査にいたる経過	1
2 調査方法・経過・調査整体系	1
3 大門遺跡調査の略歴	2
4 遺 構	3
5 遺 物	7
6 ま と め	12

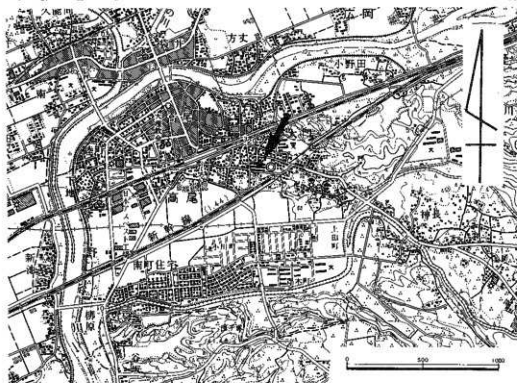


Fig 1 位 置 図

1. 調査にいたる経過

今回調査対象となった袋井市消防団第2分団消防車庫は、都市計画の観点から旧市役所への移転が決定した。しかし、移転先の旧市役所跡地には先の大門遺跡第2次調査の際行われた確認調査で用地全面に、弥生時代～中世にかけての遺構遺物の所在が確認されていた。建築計画が進む中で、埋蔵文化財の取扱いが問題となってきたのは9月の事であった。

これに対して教育委員会は急きょ対策の検討に入った。建設工事計画における着工が11月中旬ということであったが、現状は発掘調査を2件抱え文化振興係内での調査員の確保が不可能な状態であった。こうした現状を打開するため、異例ではあったが前年まで文化振興係に在籍していた松井（現市立図書館）を調査員として発掘調査を行う案が浮上した。

松井を調査員とした場合、図書館業務との調整がうまくいかずあるいは不可能かと思われたが、図書館長等関係者の格別の配慮で現地調査を松井が、事務経理その他の業務については文化振興係が行うこと、消防車庫建設工事が始まる11月中旬迄に調査が完了するよう実施計画を立案し、発掘調査を10月19日に開始することとした。

2. 調査方法・経過・調査整理体制

i) 調査方法

第2次調査で設定した10m方眼の測量用基本杭を利用して実測図の作成をした。遺構の実測は、20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1縮尺図を作成した。

写真撮影には、ブローニーサイズ原画（白黒）と35mmサイズ原画（白黒、カラーリバーサル）を併用した。

ii) 経 過

昭和62年10月19日～10月20日　すでに表上は重機にて除去してあったので、遺構確認を行った。攪乱があったものの遺構の残存率は非常に良かった。

同10月21日～10月27日　遺構は、住居跡、土坑等がかなりの密度で検出された。特に方形プランの住居が中期中頃のものらしく注目された。

同10月28日～10月31日　調査は、写真撮影を行い調査のすべてを終了した。

iii) 調査整理体制

調査指導機関

静岡県教育委員会文化課



PL1 遺跡遠景（南上空より）



PL2 調査風景

調査実施機関

静岡県袋井市教育委員会

教 育 長 鈴木 勲一

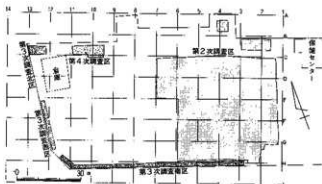
社会教育課長 井口 育夫

文化振興係長 小粥 保夫

文化振興係 吉岡 伸夫

建部千代子

市立図書館 松井 一明



(現地調査担当者)

Fig 2 発掘調査区位置図

調査整理参加者 安間しげ子 寺田松枝 樽松光子 中根世給子 高橋さか江 早川里美
名倉保子 永田のぶ枝 加藤伸江 窪野勢津子

3. 大門遺跡の調査略歴

大門遺跡も今回で4回目を迎えたためここで各調査の概略をまとめて整理しておこう。

調 査 名	調 査 期 間	担当・機関	原 因	調 査 の 概 略	文 献
第1次調査	S 37. 2. 18 ～ 2. 27	大谷純一 静岡県教委	東海道新幹線建設	弥生時代中期～後期、古墳時代前期、奈良時代の土器が出土した。	文1
第2次調査	S 57. 11. 4 ～ 3. 31	寺田義明 松井一明 袋井市教委	公民館建設	弥生時代中期～後期の堅穴状遺構、獨立柱建物、土坑、方形周溝墓、土器棺、鎌倉時代の獨立柱建物、土坑墓、江戸時代末の土坑が検出された。縄文時代中期の土器、石器、弥生時代中期～後期奈良時代～平安、鎌倉時代、桃山時代、江戸時代末の土器陶器が出土した。	文2
第3次調査	S 58. 5. 15 ～ 3. 31	寺田義明 袋井市教委	公民館外構工事	弥生時代中期～後期の土坑、柱穴が検出された。弥生時代中期～後期、古墳時代後期、奈良時代、鎌倉時代～室町時代の土器、陶器が出土した。	文2
大門大塚古墳	S 56. 10. 27 ～ 3. 30	吉岡伸夫 袋井市教委	重要遺跡範囲確認調査	弥生時代後期の堅穴住居、古墳時代後期の横穴式石室、周溝が検出された。弥生時代後期の土器、古墳時代後期の土器が出土した。	
第4次調査	S 57. 10. 19 ～ 3. 31	松井一明 袋井市教委	消防車庫建設	弥生時代中期～後期の堅穴住居、土坑、古墳時代前期の獨立柱建物等が検出された。弥生時代中期～後期、古墳時代前期の土器が出土した。	本書

文献1 静岡県教育委員会 1965 「東海道新幹線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

文献2 袋井市教育委員会 1983 「大門遺跡―大門遺跡第2次発掘調査報告書」

4. 遺 構

i) 土 層

第2次調査地点等では今まで確認し得なかった弥生時代の包含層である黒褐色土層が確認された。大門大塚古墳調査地点では古墳時代の旧地表土層である黒色土が確認されており、黒色土は中世以降の土層とした所見を修正すべきであろう。ただし、中世の方が黒味が強い。

ii) 竪穴住居跡

3棟検出された。平面プランは、SH2のように方形に近い隅丸方形のもの、SH1、3のように隅丸長方形のものがある。SH3は床面が焼けており焼失家屋と考えられる。炉はSH2から検出されており、住居のほぼ中央に位置する。各住居跡の時期は、柱穴や壁溝、床面出土の遺物からSH1、3は弥生時代後期前葉、SH2は中期中葉と考えられる。

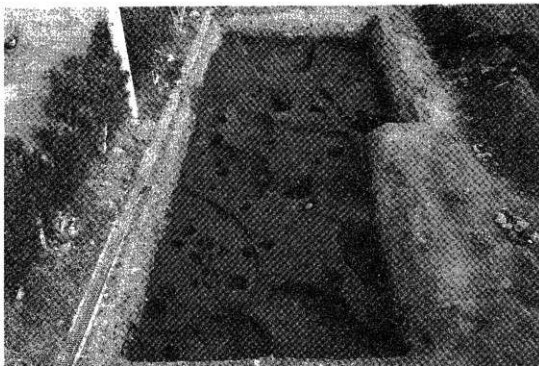
なお、SH2の南側に壁溝らしい細い溝がありSP25を柱穴とする住居跡も予想される。

iii) 掘立柱建物

近接して2棟発見されている。何れも全容を知り得ないが、柱通りの悪い小柱穴からなる建物で、倉庫というより平地式住居であろう。床面直上と思われる包含層より古墳時代前期の土器が出土している。なお、第2次調査の鎌倉時代としたSB6は再検討の必要があろう。

iv) 土 坑

7基発見されている。底面が皿状を呈する浅いSK1、5、7、断面コの字状に深く掘りこ



PL3 発掘全景

んだSK2、3、4、6がある。SK4等は部分的に袋状に掘り込んでいる。いずれの土坑からも大型の土器片が多数出土しており、廃棄土坑と考えられるがSK4等の形態から後者の土坑については一部貯蔵穴を含むかもしれない。出土遺物はいずれも弥生時代後期前葉を示す。遺構の新旧関係は、SK2、3、4、5、6、7は竪穴住居跡よりいずれも新しい。

v) 小 穴

調査区域全面にわたって、小穴が確認されたが多くは、浅かったり柱穴状を成さないものが多かったが、SP26、SP27等は、深く柱穴と考えられるものである。SP26は一辺1.2mを測る方形の柱穴で第2次調査のSB1、2などの大型掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。SP27は直径0.8mを測るさほど大きくない円形の小穴で、竪穴住居の柱穴と考えても良からう。SP27からは弥生土器の小片が、SP26からは弥生時代中期中葉～後期前葉の土器片が出土しているが、須恵器甕形土器の小片が出土しているため古墳時代後期～奈良時代の時期かと思われる。

vi) 溝状遺構

SH2を縦断する形で検出されている。浅く直線的にのびる溝で、2本の溝が重なりあって検出されている。覆土はいずれも近世以降のもので、第2次調査で検出されている江戸時代末に掘られた畑地の区画溝と考えられた溝状遺構と主軸方向もあうため、同じ用途の溝状遺構と思われる。

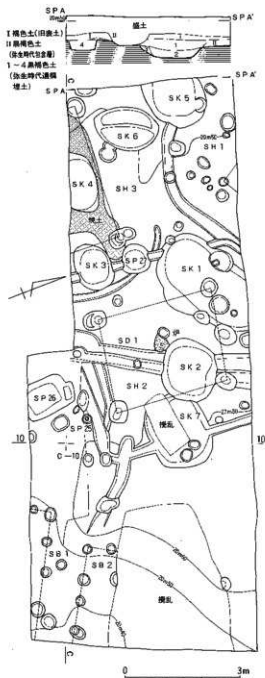


Fig 3 全体図

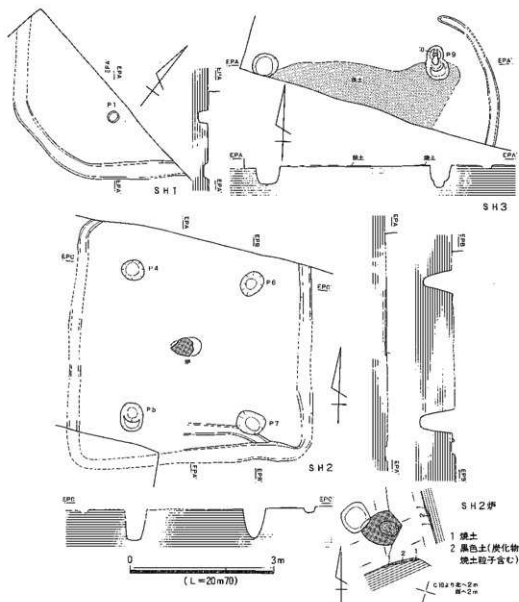
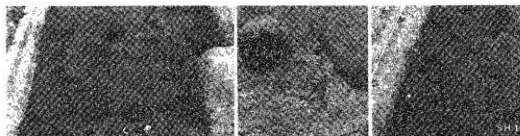
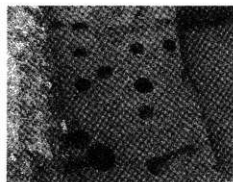


Fig 4 竪穴住居跡実測図



PL 4 竪穴住居跡 (SH2西より、SH2如、SH1)



PL 5 掘立柱建物（東より）



PL 6 土坑·小穴

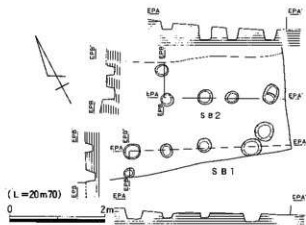


Fig 5 掘立柱建物实测图

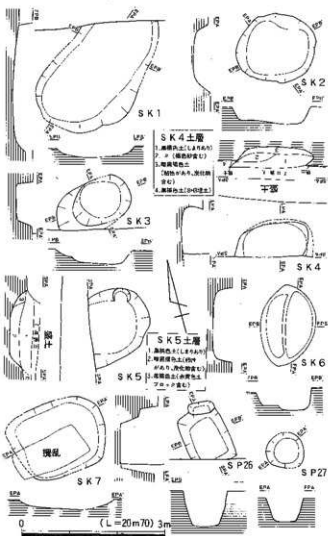


Fig 6 上坑·小穴突剖面

5. 遺 物

今回の調査では小面積であったもののポリコンテナ10箱分の遺物が得られ、時期も弥生時代を中心として奈良時代のものが得られた。土器分類は、第2次調査報告に準拠した。

i) 弥生時代中期の土器

中葉のもの、後葉のものがある。中葉のものは、SH2を中心として出土している。壺形土器は、細頸タイプになると思われる9、11、83～86がある。(細頸壺A1類)受口の広口壺は、受口をシャープにする33(広口壺B1類)と緩やかに立ち上げる3(広口壺B2類)がある。32は3の肩部文様になると思われる。19も条痕系の広口壺であろう。甕形土器は、4～6、82、87の緩やかに開く口縁部を持つもののみである。(甕A類)ただし、4は体部調整、5については刻み日にはけ状工具を使用しておりやや下る要素を持つものがある。後葉のものは、土坑状遺構から後期前葉の土器に混じって出土している。壺形土器は、18、36、48、49の横書き横線文を多用する細頸壺がある。

ii) 弥生時代後期前葉の土器

土坑状遺構を中心としてまとまって出土している。壺形土器は、折り返し口縁の広口壺(A1類)の42、A1類と同形であるが単純口縁で口唇端部に面を作るの広口壺(B2類)の51、53、あまり外反しない単純口縁の広口壺(B2類)の10、やや内彎させた単純口縁の広口壺(C2類)の1、口縁の外反度の強い受口の広口壺(D2類)の20、34、外反度の弱い受口の広口壺(D1類)の71がある。横位横線文の施された72は胎土から見ると在地産である。他に小形壺として17、41、52がある。

壺形土器は外反した単純口縁で端部に面を作り刻み目を施する(A類)の27、28、45、64、折り返し口縁で刻み目を施す(B1類)の66、刻み目の無い(B2類)65がある。脚部に粘土帯をはどこす29、30、81など西遠地域で盛行する手法のものが目立つ。

高坏は大きく開いた鐔状の単純口縁(A1類)の22、折り返し口縁の(A2類)の23、44、74、鐔状口縁にならない(A3類)の60がある。

鉢形土器は内彎する口縁(C類)の31、50、受け口状口縁(A類)の79がある。

iii) 古墳時代前期の土器

SB1、2付近より出土している。短く外に開く広口壺の12、欠山式から系譜を引くと思われる高坏の13、Ⅲa類ではあるが内面にはけ調整の見られるS字麗の16などが外来系土器としてみられる。一方、在地系土器としては、駿河湾から中東遠地域に分布のある14の折り返し口縁の広口壺、中遠地域に分布する作りの粗雑な有段羽状文が施された15がある。

iv) その他の遺物

石器として92の扁平片刃石斧、93、94の打製石包丁がある。93、94とも大竜川系の変成岩を素材とし表面に自然面を残した剥片を利用している。95は、両側縁に抉りを入れている。時期は出土遺構から92は弥生時代後期前葉、93、94は同中期中葉である。

88、90の須恵器の壺と高台坏は奈良時代前半期、89の坏は後半期と考えられる。

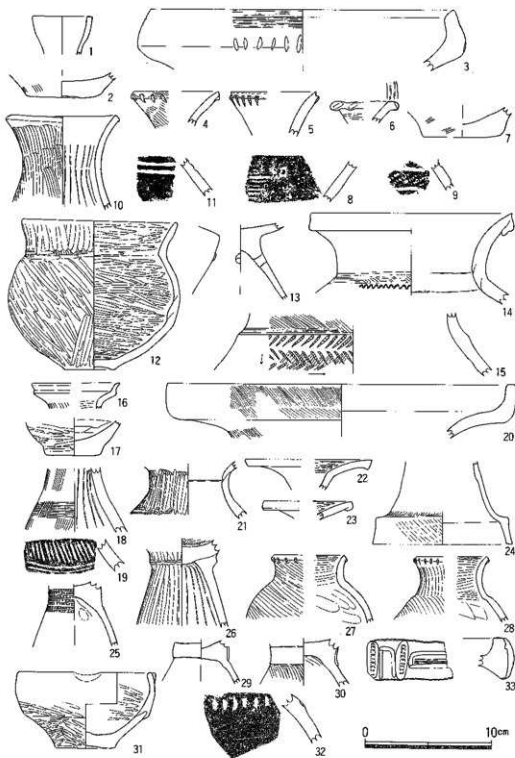


Fig 7 遺物実測図(1) (1~2 SH1、
3~9 SH2、10~11 SH3、12~17 SB1・2、18~19 SP27、20~32 SK1)

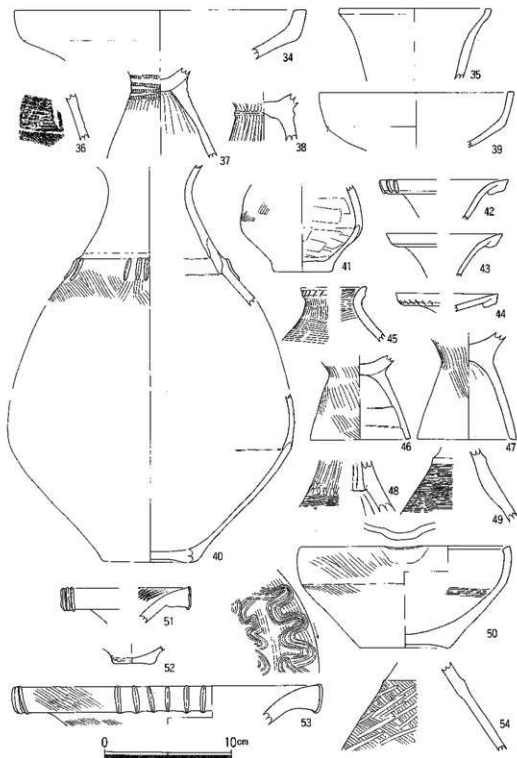


Fig 8 遺物実測図(2)
(34~39 S K 2、40~50 S K 3、51~54 S K 4)

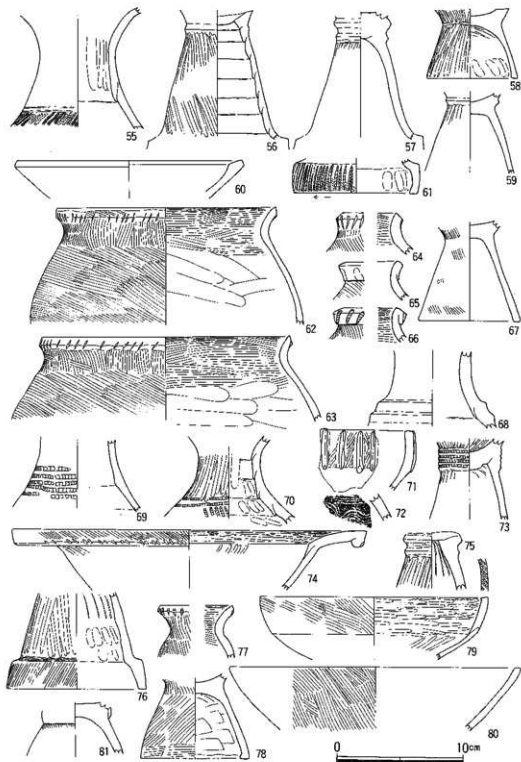


Fig 9 遺物実測図(3)
(55~67 SK 4、68~80 SK 5、81 SK 6)

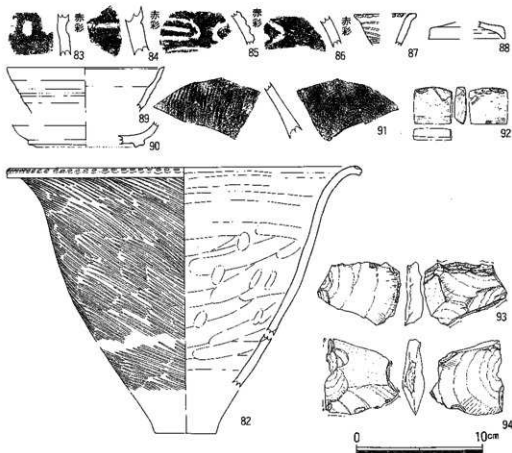
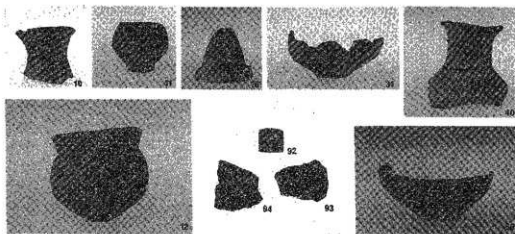


Fig 10 遺物実測図 (4)
(82SK 5、83~91包含層・表土、92SK 4、93~94SH 2)



PL 7 遺物写真 (番号は実測番号に同じ)

6. ま と め

わずかに約70㎡という小面積の調査であったが得られた成果は大きいものがあった。まとめて見ると、1. 県内でも2例目という弥生時代中期中葉の堅穴住居跡が検出された。またこれに伴う打製石包丁が発見されるなど、農耕導入過程を知るうえで重要な発見があった。2. 土坑より弥生時代後期前葉の一括資料が得られた。3. 県内でもまだ確認例の少ない古墳時代前期の掘立柱建物が発見された。この中で本項では、得に重要な成果であると考えられる1の点について考察しまとめたい。

県内での中期中葉の住居跡の調査例は、少なく浜北市芝本遺跡B地点の隅丸方形住居1軒が知られているだけである。静岡県外の中郡域ではどうであろうか各県の状況を見てみよう。

三重県では中期中葉の住居跡は納所、起A、東庄内B、片野、上地山遺跡でまとまって発見されている。Fig 11を見ると隅丸方形、隅丸長方形を主体とする納所、起A、片野遺跡と円形のもの50%前後になる東庄内B、上地山遺跡に別れる。円形住居は西日本タイプといわれ(石野 1981)三重県では他に平田遺跡などで見られ、円形住居が多く見られる西日本形の住居形態を持つ集落と東日本形の隅丸方形、隅丸長方形が主体となる集落に別れそうである。愛知県では濃尾平野の拠点集落と考えられる朝日遺跡の例は貝田町期の住居としてはっきりしているものを見ると、隅丸方形、隅丸長方形が80%近く占めるが、円形のものも小数ある。同じ拠点集落と考えられている阿弥陀寺遺跡でも円形住居が小数見られる。一方同じ濃尾平野でも北部域の美濃地方牧野小山遺跡では円形のは確認されない。

長野県の伊那地方では尾の島館(中期前葉)、阿島遺跡で隅丸方形のものが発見されており、隅丸方形を主体とする地域かと思われるが例が少ない。同じ長野県下でも北信の千曲川流域では塩崎遺跡群で70%の隅丸方形、隅丸長方形のものに混じって、円形、楕円形のものが見られる。やや時期が下がる果林期の古手の土器を出した上野村西D遺跡では、70%が円形住居であり伊那地方とは対照的である。千曲川流域の特色はさらに松本平の横山城遺跡(中期前葉)で円形、楕円形住居、宮瀬本村遺跡(中期末葉)で楕円形住居が発見されており、千曲川流域との関係が考えられるが例が少ない。神奈川県では、王子台遺跡で隅丸方形、隅丸長方形、不定形の住居が発見されており円形のものはないらしい。同様に子ノ神遺跡でも隅丸方形の住居が発見されているが、円形のものはない。埼玉県の池上遺跡でも隅丸方形、隅丸長方形の住居が主体で円形のものがなく南関東から静岡県にかけては、円形の住居跡は管見では知り得ない。

以上のことからまとめてみると、1. 三重県では、西日本タイプの円形住居が多く50%以上見られる集落がある。(A地域) 2. 濃尾平野では円形住居は少なくなるものの若干見られる。(B地域) 3. 長野県伊那谷・静岡～関東までは円形住居はない地域といえる。(C地域) 4. 千曲川流域では円形住居が見られる地域である。(B地域、あるいはA地域か?)

1、2の点については畿内を通じた西日本の影響下での状況として良いだろう。3つの点については土器様式の点からもB地域とは大きな隔りがあり、住居形態からは西日本の影響は見られない地域である。4の点については1、2の地域と共通するものがあり、松本平との係

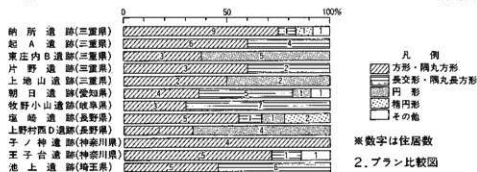
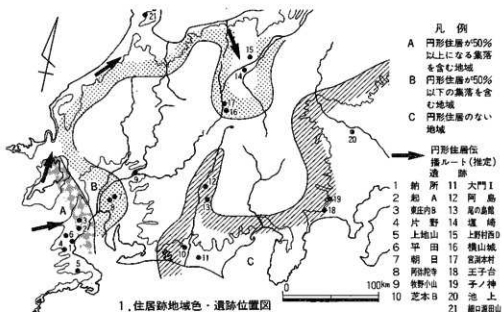


Fig 11 中部地方弥生時代中期竪穴住居跡分析図

りから東山道ルートといったものを考慮にいれるべきかも知れないが、美濃地方の牧野小山遺跡の状況を見るとたどれない。北陸の状況はデータが少ないものの権氏(楠他 1983)らの論文を参考によると、中期の細川源田山遺跡で円形のものが見られ、後期でも円形40%、隅丸方形50%と高い比率で円形住居が見られる地域である。このことから北信地方の円形住居の伝播ルートは、北陸ルートを考えたほうが良いだろう。

住居プランの点からだけ中部地方弥生時代中期中葉の堅穴住居跡について考えてみたが、いまだデータが少なくほとんど予察といって良いだろう。仮にこうした堅穴住居の地域色の設定が可能ならば、土器様式の地域色からとはまた違った社会観が描けるであろう。最後になりましたが忙しいなか調査から本書刊行まで協力して頂いた図書館職員の方々にお礼申し上げます。

参考文献（各遺跡の報告書の出典は紙面の関係で省略しました）

補 他 1983 「北陵の弥生・古墳時代の堅穴住居跡」『北陵の考古学』

石野博信 1981 「住居型の地域性」『三世紀の考古学』中巻

大門遺跡

—大門I遺跡第4次—
発掘調査報告書

発行日 1988年3月31日

編集 袋井市教育委員会

発行 袋井市国本3070-1

Tel (0538) 43-2111

印刷 徳開明堂

浜松市中沢町1-1

